

目的 桜島は昭和40年代末から火山活動が活発さを増し、風向きによっては隣県の宮崎にまで灰を降らせる程の噴煙を上げている。こうした降灰はさまざまな方面へ有形無形の影響を与えているが、特に住民の生活意識、子供の生活や遊びへ及ぼす影響に関する調査研究は数が少ない。

本研究は、桜島の降灰下に生活している主婦の目を通して、子供の生活を把握しようとしたものである。

方法 桜島島内の調査については、行政区域別に、危険率5%以内で、桜島全島27地点から比例配分によって1250世帯を抽出し、1989年2月～3月に質問紙による留置調査を行った。回収率は87.5%（1094世帯）で、有効回答数は988名、このうち現在、幼児から小学生の子供を持つ家庭は283世帯であった。調査の結果は、降灰量の多少による区分地域による比較、現住の子供と回答者の子供の頃との比較等を行った。

また、鹿児島市内における調査を実施し、参考として比較した。

結果 日常の遊び場について、現在の子供は「自分の家の中」を挙げる者が最も多く、遊びの内容についても室内遊びをよくしており、戸外遊びはあまりしていない。この傾向は降灰量の最も多い地域で強い。桜島で生まれ育った回答者が子供の頃の遊び場として挙げたものは「海岸」が最も多く、遊びの場が戸外から室内へ移ってきている様子が桜島でも顕著である。また、降灰量の最も多い地域では、桜島で育った子供は「互いに助け合う習慣が育つ」との回答が最も多く、その他の地域と傾向を異にしていた。